

## 卒業生を対象とした授業評価の分析と評価 —保育内容「表現」のポータビリティについて—

羽根田 真 弓

Mayumi HANEDA : An Analysis and Assessment of the Value of Course Instruction to Post-graduate Students—The Portability of Music Activities in Infant Education with a Focus on the Expressions Curriculum—

本研究では、保育内容「表現」の学生の理解度を明らかにするために、卒業生を対象に授業評価としての質問紙調査を実施した。その結果、領域「表現」についてはポータビリティは高いことが明らかにされた。しかしながら、子どもの表現活動に対する保育者の援助については、実践に結びついていないことが明らかとなった。今後は、子どもの表現活動への援助・指導を行う実践力および応用力を学生が習得するための保育内容「表現」の指導法について検討しなければならない。

キーワード：ポータビリティ 保育内容 表現 領域 音楽的専門性

### 1 目 的

領域「表現」が改訂されてから今年で18年が経過した。この改訂の趣旨は、子どもの活動を総合的な発達の側面から援助するという捉え方に根ざしたものであり、それまでの、達成目標を設定して特定の活動を行い、訓練的指導や知的理解を求めた内容とは異なるものであった。それでは領域「表現」は保育現場および保育者養成校にどのように受け止められ、浸透しているのだろうか。残念ながら保育現場では、領域「表現」に対応した変化に乏しく、未だ共通認識されていないことを筆者は前号の鳥取短期大学研究紀要第55号で報告した<sup>1)</sup>。併せて保育者養成校においても保育内容「表現」の開講形態が養成校によって様々に異なっている実態も報告した。

そこで本研究では、保育者養成校における保育内容「表現」について、学生たちの理解度という観点から探ることにした。具体的には、本学の卒業生た

ちを対象に筆者が担当した科目「表現2」の授業評価をさせ、卒業生たちが保育内容「表現」を「どの程度理解し、保育現場で実践・活用」(Portability)しているのかを明らかにするものである。なお、ポータビリティ (Portability) とは、認知科学の研究者である三宅なほみらによる概念および用語であり、大学の教室の中だけではなく、別の場所つまり保育現場に「持ち出して」使える知識である。

### 2 方 法

#### (1) 調査対象と方法

調査対象者は鳥取短期大学幼児教育学科を平成16年度、17年度、18年度に卒業し、保育者として就職した卒業生257名のうち62名である。内訳は、幼稚園教諭7名、保育士55名である。また16年度卒業生が17名、18年度卒業生が14名、18年度卒業生が31名である。回収率は29%であり、調査方法は無記名による郵送回答である。

調査時期は2007年5月から6月である。

## (2) 調査内容

調査項目は次の7項目である。

- 1) 現在、保育者として領域「表現」のねらいや内容を理解できているか
- 2) 子どもたちの表現を育むために、保育者としての援助について十分に理解できているか
- 3) 子どもたちの音楽表現活動に対して、保育者としてどの程度援助できているか
- 4) 在学中の保育内容「表現」の開講形態について、保育者となった現在どのように思うか
- 5) 領域が相互に関連し、総合的な指導がなされなければならない保育について理解できているか
- 6) 子どもたちの表現を援助するために、保育者には音楽的な技術がどの程度重要であるか
- 7) 保育者養成課程において、音楽の専門教育は必要であるか

項目4)以外、すべて5段階評定で回答を求めた。さらに、各設問ではあらかじめ理由項目を設定して回答を求めた。

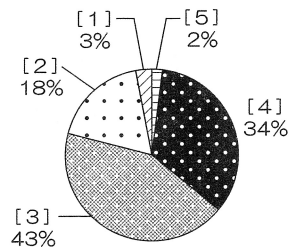
## 3 結 果

質問項目別に結果を示す。

- 1) 現在、保育者として領域「表現」のねらいや内容を理解できているか

図1は「十分理解できている」から「全然理解できていない」の5段階評定による結果を示している。5段階評定による回答の平均値は3.13であった。保育者としての経験年数別の平均値では、経験年数2年経過が3.12、1年経過が2.93、1ヶ月経過が3.23である。経験年数別に分けて平均値を分析した結果、経験年数の違いによる有意差は認められなかった。

さらに4項目の回答理由を設定し、回答を求めた結果、「在学中から授業をとおして理解できた」とする回答は49%、「授業では理解できなかったが、保育者になって理解できた」とする回答が24%、「在学中から理解することが困難であり、現在も理解で



[5] 十分理解できている [4] 理解できている [3] どちらともいえない [2] あまり理解できていない [1] 全然理解できていない

図1 領域「表現」が理解できているか

きていない」とする回答が16%、「その他」が11%であった。

また、保育者としての経験年数別に回答理由の割合を示すと、経験年数2年経過では、「在学中から授業をとおして理解できた」とする回答が46%、「授業では理解できなかったが、保育者になって理解できた」とする回答が24%、「在学中から理解することが困難であり、現在も理解できていない」とする回答が6%、「その他」が24%であった。経験年数1年経過では、「在学中から授業をとおして理解できた」とする回答が29%、「授業では理解できなかったが、保育者になって理解できた」とする回答が43%、「在学中から理解することが困難であり、現在も理解できていない」とする回答が21%、「その他」が7%であった。経験年数1ヶ月経過では、「在学中から授業をとおして理解できた」とする回答が59%、「授業では理解できなかったが、保育者になって理解できた」とする回答が16%、「在学中から理解することが困難であり、現在も理解できていない」とする回答が19%、「その他」が6%であった。

在学中に理解をしていたとする回答は経験年数1ヶ月の卒業生に最も多く見られるが、一方、保育者になって理解したとする回答は経験年数1年、2年の卒業生に多く見られる。また、現在も理解できていないとする回答では、経験年数1年および1ヶ月よりも経験年数2年の卒業生ではかなり少なく

なっている。

2) 子どもたちの表現を育むために、保育者としての援助について理解できているか

項目1)と同様に、「十分理解できている」から「全然理解できていない」の5段階評定で回答を求めた結果、「5」は無回答、「4」が24%、「3」が53%、「2」が21%、「1」が2%であった。5段階評定による回答の平均値は3.0であった。保育者としての経験年数別の平均値では、経験年数2年経過が3.0、1年経過が3.07、1ヶ月経過が2.97である。経験年数別に分けて平均値を分析した結果、経験年数の違いによる有意差は認められなかった。また、項目1)と項目2)の平均値には中程度の相関が見られた( $r=.46$ )。

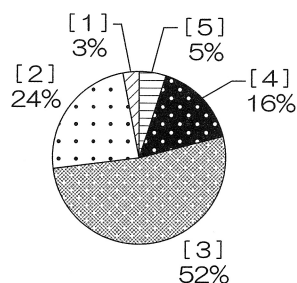
さらに4項目の回答理由を設定し、回答を求めた結果、「在学中から授業をとおして理解できた」とする回答は27%、「授業では理解できなかったが、保育者になって理解できた」とする回答が39%、「在学中から理解することが困難であり、現在も理解できていない」とする回答が13%、「その他」が21%であった。

保育者としての経験年数別に回答理由の割合を示すと、経験年数2年経過では、「在学中から授業をとおして理解できた」とする回答が6%、「授業では理解できなかったが、保育者になって理解できた」とする回答が44%、「その他」が50%であった。経験年数1年経過では、「在学中から授業をとおして理解できた」とする回答が36%、「授業では理解できなかったが、保育者になって理解できた」とする回答が29%、「在学中から理解することが困難であり、現在も理解できていない」とする回答が21%、「その他」が14%であった。経験年数1ヶ月経過では、「在学中から授業をとおして理解できた」とする回答が32%、「授業では理解できなかったが、保育者になって理解できた」とする回答が42%、「在学中から理解することが困難であり、現在も理解できていない」とする回答が16%、「その他」が10%であった。このように、現在も理解できていないと

する回答は、保育者としての経験年数1年では21%、1ヶ月では16%とそれぞれ回答が見られるが、2年経過では見られなかった。

3) 子どもたちの音楽表現活動に対して、保育者としてどの程度援助できているか

図2は「十分援助できている」から「全然援助できていない」の5段階評定による結果を示している。5段階評定による回答の平均値は2.95であった。保育者としての経験年数別の平均値では、経験年数2年経過が3.12、1年経過が3.14、1ヶ月経過が2.77である。経験年数別に分けて平均値を分析した結果、経験年数の違いによる有意差は認められなかった。



[5] 十分援助できている [4] 援助できている [3] どちらともいえない [2] あまり援助できていない [1] 全然援助できていない

図2 音楽表現活動に援助できているか

さらに4項目の回答理由を設定し、回答を求めた結果、「在学中から援助のあり方について授業をとおして理解できた」とする回答は24%であり、一方、「援助の方法がよくわからない」とする回答が10%、さらに「援助するための技能に不安がある」とする回答が53%も見られ、注目できる。「その他」は13%であった。

経験年数別の回答理由の割合は図3のとおりである。「援助の方法がよくわからない」とする回答は、経験年数1ヶ月経過した卒業生では13%見られるが、経験年数1年では7%、経験年数2年では6%とわずかではあるが減少している。一方では、「援助するために不安がある」とする回答は経験年数1

年が43%，経験年数1ヶ月が51%に対して，経験年数2年では65%と多くなっている。

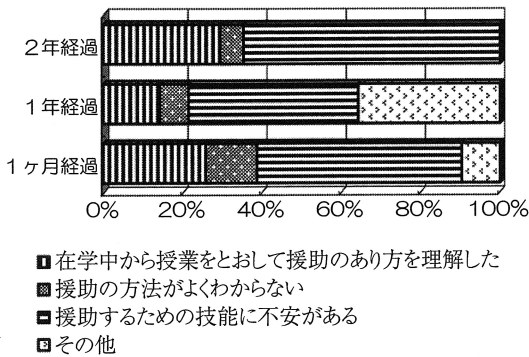


図3 経験年数別の回答理由の割合（項目3）

4) 在学中の「表現」に関連した授業について，保育者となった現在どのように思うか

分野を分けて開講したほうがよいとする回答が87%と圧倒的に多く，分けないほうが望ましいとする回答は2%，どちらとも言えないとする回答は11%であった。分けたほうが望ましい理由については，それぞれの分野が深く理解でき，わかりやすいという内容であった。

5) 領域が相互に関連し，総合的な指導をする保育について理解できているか

「十分理解できている」から「全然理解できていない」の5段階評定で回答を求めた結果，「5」は6%，「4」が37%，「3」が37%，「2」と「1」がそれぞれ10%であった。5段階評定による回答の平均値は3.2であった。経験年数別の平均値と標準偏差値は表1のとおりである。経験年数別の平均値に5%の有意差が認められた ( $F(2, 59) = 3.549$ ,  $p < .05$ )。さらにLSD法を用いた多重比較によれば，対象者の経験年数別の平均値の大小関係は経験年数1ヶ月 > 経験年数1年 = 経験年数2年であった ( $MSe = 1.0027$ , 5%水準)。この結果は，筆者が平成18年度に領域間相互の関連を強調した授業を実施したことと一致している。

表1 経験年数別の平均と標準偏差

	2年経過	1年経過	1ヶ月経過	N=62
$\bar{X}$	2.88	2.86	3.55	
SD	1.05	1.23	0.85	

さらに4項目の回答理由を設定し，回答を求めた結果，「在学中から授業をとおして理解した」とする回答は42%，「授業では理解できなかったが，保育者になって理解できた」とする回答が32%，「在学中から理解することが困難であり，現在も理解できていない」が18%，「その他」が8%であった。保育者としての経験年数別の回答理由の割合は図4のとおりである。

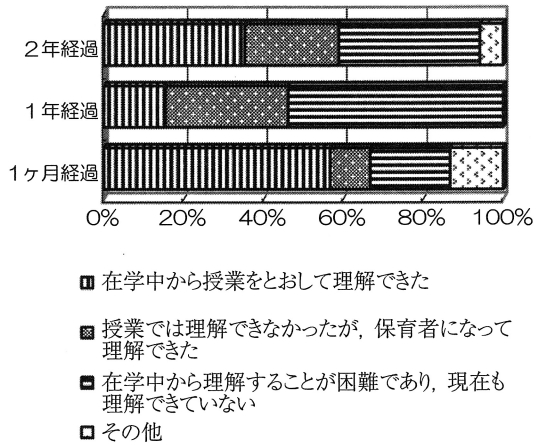


図4 経験年数別の回答理由の割合（項目5）

6) 子どもたちの表現を援助するために，保育者には音楽的な技術がどの程度必要であるか

5段階評定による回答の平均値は4.32であった。さらに，次の8項目を回答理由として設定し，複数回答を求めた。

- i ピアノ伴奏は重要である
- ii ピアノ伴奏は重要ではない
- iii 歌唱指導は重要である
- iv 歌唱指導は重要ではない
- v 音楽の専門的知識および技術は，子どもの発達に即した指導上重要である



- vi 音楽の専門的知識および技術は、子どもの発達に即した指導上重要ではない
- vii 現在、特に必要性を感じていない
- viii その他

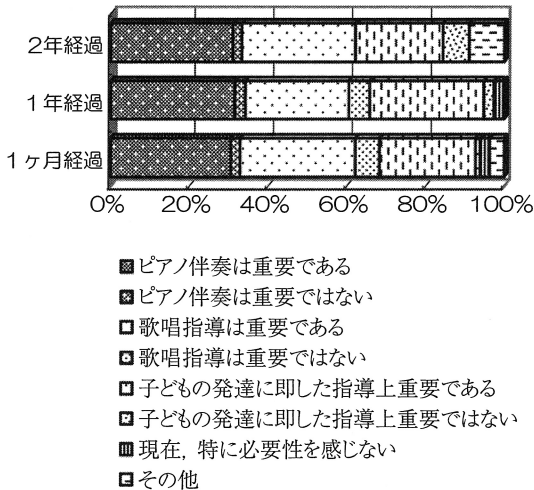


図5 音楽的知識・技術の必要性

その結果、図5のとおりピアノ伴奏の重要性、歌唱指導の重要性、音楽の専門的知識・技術の重要性が圧倒的に多く示された。「特に必要性を感じない」とする回答はわずかではあるが経験年数1年経過に3%、1ヶ月経過に2%見られた。

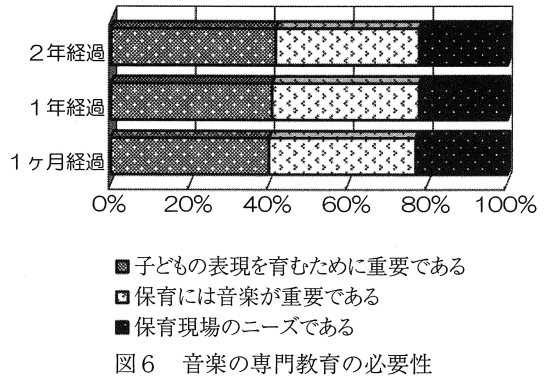
- 7) 保育者養成課程において音楽の専門教育は必要であるか

5段階評定による回答の平均値は4.50であった。さらに、次の5項目を回答理由として設定し、複数回答を求めた。

- i 子どもの表現を育むために必要である
- ii 子どもの表現を育むために必要ではない
- iii 保育には音楽が重要である
- iv 保育現場のニーズである
- v 特に必要ない

その結果は図6のとおりである。「特に必要ない」とする回答は見られず、音楽の専門教育の必要性が強く示された。この結果は、保育現場を対象に実施した調査結果<sup>2)</sup>と同様である、つまり、保育現場で

は音楽の専門的知識・技術が一貫して重要視されており、今回保育者となった卒業生たちも音楽の専門的知識・技術に対する必要性について明確に意識していることが明らかとなった。



#### 4 考 察

本研究の目的は、保育内容「表現」の学生の理解度を明らかにすることである。項目1)の結果で示されるように、領域「表現」については学生にある程度理解されており、ポータビリティは高いと考えられる。しかしながら、子どもたちの表現活動に対する援助については、保育者として援助する方法がわからない、あるいは援助するための技能に不安を抱えていることから実践方法にかなりの戸惑いがあることが明らかとなった。つまり、領域「表現」についてはポータビリティが高いが、子どもの音楽表現に対する保育者の援助については実践に結びついていないと推測できる。おそらく、知識として理解していても、保育者としての支援や援助という形では応用できないのではなかろうか。この実態は、翻れば保育内容「表現」の授業内容および方法を問うものであり、教師が意図する「保育内容」と学生たちが保育現場で抱える問題の間に相違があることが窺える。

小川(2000)は、学生が子どもの音楽表現活動を追体験することにより、子どもの音楽表現を理解し、子どもにかかわることができる<sup>3)</sup>と述べている。

らに、今川（2007）は、音・音楽を介した表現教育ではなく、自然環境・自然的環境との相互作用をとおして学生自身が自らの表現者としての育ちを実感する表現教育プログラムの実践を行っている<sup>4)</sup>。今回の質問紙調査で学生の保育の実践力および応用力が不足していることが指摘できるように、子どもの表現活動への理解、そして読み取りから子どもへのかかわりが保育の実践力となるべく保育内容「表現」の検討が今後はなされなければならないと考える。

保育内容「表現」の授業形態については、圧倒的にそれぞれの分野にわけて開講したほうがよいという回答が圧倒的に多く見られた。この結果は、本学の「音楽表現」「身体表現」「造形表現」に分けた開講形態を支持するものであると考えられる。

領域が相互の関連を有し、総合的な指導をする保育については、およそ半分が授業をとおして理解しているものの、反面、現在も理解できていないとする回答が18%も見られたことは注目しなければならない。よって、既述したように領域「表現」の改訂の趣旨についての理解が徹底していない問題として取りあげなければならない。

一方では、音楽の専門的知識・技術への必要性が高く意識されており、保育内容のための技能に関して卒業生たちの関心が高いことが明らかにされた。この実態は、音楽の実践指導は必要不可欠であるという捉え方から、子どもの音楽表現活動の援助には音楽の専門的知識・技術が一貫して重要視されているという保育現場を対象とした調査報告<sup>5)</sup>と一致している。今回の調査においても、保育には音楽が必要であり、保育現場のニーズであることが卒業生にも意識されており、保育現場の実態として受け止めることができる。

## 5 今後の課題

今回の調査結果では、領域「表現」のねらいや内容については認識されていながら、保育者としての支援や援助が十分に果せていないことが明らかにさ

れた。この結果は、保育者養成校を対象とした調査<sup>6)</sup>において保育内容「表現」の教授法および内容の検討を要する意見が圧倒的に多く示されたことと関連している。したがって、子どもの表現活動への指導・援助を行うための実践力を学生が習得するために、体験的もしくは実践的プログラムを導入した保育内容の指導法を含めた議論が今後必要であると考える。

さらに、保育者となっている卒業生が音楽の専門性・技術に対して意識が高いことから、保育者としての音楽の専門性についても今後の問題点として取りあげていかなければならない。そのうえで、保育実践に必要とされる技能と保育内容の相互の関連性をふまえた保育者養成の研究をすすめなければならない。

今回の質問紙調査では対象を卒業直後、1年、2年とした。この期間では、保育者としての経験年数による大きな変化は見られなかった。今後は卒業後5年および10年を経過した卒業生を対象とした調査を実施したい。

## 付記

本稿は、筆者が全国大学音楽教育学会第23回全国大会（加計国際学術交流センター 2007. 9. 1）でおこなった口頭発表を加筆修正したものである。

## 註

- 1) 羽根田真弓「『表現』の改訂によって保育内容における音楽活動はどのように共通認識されているか、その現状と課題—幼稚園と保育者養成機関への質問紙調査の分析から—」『鳥取短期大学研究紀要』第55号、2007、p33-40
- 2) 前掲書 1
- 3) 小川博久「保育援助論」『生活ジャーナル』2000
- 4) 今川恭子「環境を通した表現教育の試み—子どもたちの姿から保育者養成へ—」『音楽教育実践ジャーナル』Vol.4 no.2 2007
- 5) 前掲書 1
- 6) 前掲書 1